

問の構造

— 解釋學的 研究 —

三 木 清

あらゆる問は必然的に三つの契機を含んでゐる。

問の第一の契機は「問はれたもの」である。例へば歴史は客觀性を有するか、と云ふ問にあつては、歴史がそれである。問はれたもの、この場合では何が歴史であるかと云ふことは、問の視野のうちに或ひは一層多く或ひは一層少く這入つて來ることが可能である。むしろそれが何であるかが明瞭にされてゐないことが普通である。

問はれたものは誰も知つてをり、何人も理解してゐる、とひとはずねに豫想する。従てみづからもまたそのものに就て特に問ふことなく、問ひ直すことなく、恰もそれが彼にとつて自明なもの、熟知されたものであるが如く思ひ做して、それに就て論議する。自己が何に就て語つてゐるのであるかをみづから知らずしてしかも雄辯に議論し得ると云ふ笑ふべき現象はかくして生れるのである。第二に、問に於ては問は

れたものが單純にそのものとして問はれるのではなく、却てそれが何物かとして問はれる。問には「問はれたこと」がある。問はれたことに於て問はれたものはつねに何物かとして問はれる。前の例を用ゐるならば、我々は一般に歴史そのものについて尋ねてゐるのでなく、却て客觀性に關はる限りに於ける歴史について問ふてゐるのであつて、この限りに於ける歴史が恰も問はれたことである。換言すれば、この問にあつては、歴史はそれがそも／＼客觀性に關係あるものとして決められて問はれてゐる。問はれたものは問はれたことに於てアクセントを附けられ、まさしくその姿に於て問の中に現はれて來る。問はれたものは問はれたこととして初めて、問の視野に於て見ゆべきものとなり、顯はなるものとなる。それはそれ自身としては問の中に現前してゐないのである。従て普通ひとが問はれたことを直に問はれたものと同一視してゐるのは最も自然なことであらう。問に於ける第三のものは「問の觀點」である。我々の例で云ふならば、歴史がそれを目當てとして問はれるところのもの、即ち客觀性がそれである。問は單純に問はれることなく、いつでも何かを目差して問はれる。この問の觀點に於て問はれたことは自己を顯はにする。それによつて問はれたことは何物かとして「の性格を得て來る。問の觀點は、如何に問は

れたものものに於て、それに於ける可能なる契機、我々の場合では可能なる客觀性の契機が見出され得るか、と云ふことに對する根源である。かくして觀點が間に於て最も重要な契機であることは明白であらう。なせなら、右に述べたやうに、問はれたものは問はれたことに於て限定され、そして問はれたことは問の觀點によつて限定されるのであるが故に、この二段の限定の過程に於て最後の限定根據となるものはつねに問の觀點であるからである。如何なる問もかくの如き限定の内面的聯關を自己のうちに含んでゐる。そして恰もその故に凡ての問は悉く或る種の必然性を粧ふことが出来る。なせかならば、ひとたび觀點が定まるや否や、それによつて問はれたことは必然的に限定され、そしてこのものに於て問はれたものはまた必然的に限定され、このやうにして問の觀點は問の全體を一定の方向に決定することによつて、如何なる場合にもそれに必然的なる構造を與へるからである。

然しながら問の有するこの必然性こそ多くの無意味なる問の存在を可能ならしめるものであることは特に注意されねばならぬであらう。我々の明らかにした必然性は問の構造そのものゝ有する形式的なる必然性である。しかるにひとは屢この形式的なる必然性を直に實質的なる必然性の如く思ひ誤つてゐる。むしろ彼は

彼の問がいつでも形式的なる必然性をもつてゐるのに欺かれて、それが果して實質的なる必然性を有するや否やを吟味することを怠つてゐるのがつねである。そこに虚偽と錯誤との可能性は存在する。それでは問の實質的なる必然性とは何を謂ふのであらうか。すなはち問はれたものと問の觀點との内面的連絡がそれである。問に於ては觀點と問はれたものとの關係が偶然的でなく必然的であることが重要である。觀點は問はれたものゝうちから生れ、問はれたものによつて要求されてゐるが如きものでなければならぬ。我々はなによりも問はれたものに無關係なる觀點をもつてそのものを問ふことを慎しまねばならぬ。簡單に言へば、問は問はれたものから問はれねばならぬ。若し觀點の選び方にして誤つてゐるならば、固よりこのときと雖も問はそれ自身として必然性を具へてゐるにも拘らず、この問は無意味なるものとなるであらう。我々は問ふに當つて我々の問の觀點が我々の問ふところのものど内面的なる關係を有するか否かを絶えず願慮すべきである。この用意は我々に必然的に課せられてゐる。なせなら、問の構造は問はれたものがそれ自身としては問の視野のうちに顯はに現はれぬことを必然的ならしめてゐるから、従て問はれたものは忽せにされ、無視される可能性を自らのうちに必然的に含んでゐる。

るから。無意味なる問を避けるためには、我々は問はれたものと交りそれと親しむことによつて、問の觀點をそのものに於て養ひ、そのものから導いて來ることが大切である。あらゆる學問が問に始る以上、物の熟知は眞の學問の條件である。何故に我々は我々の實際の生活に於ては極めて稀にしか無意味なる問に出會はないのであるか。誰も石に向つて君はパンをもつてゐるか、問はないであらう。ひとは石そのものがパンの所有とは無關係であることを知つてゐる。彼は或ひは家を作るために、或ひは紀念碑を建てるために石を用ゐることによつて、石の存在をその存在に於て熟知してゐるからである。物の熟知は無意味なる問の提出を妨げる。然るに我々は學問の領域に於てはあまりに屢無意味なる問を見出すのである。そこには何等か特殊なる理由があるのであらうか。多くの無意味なる問が存在すると云ふことは物を認識すべき學問が物について却て無知であることを告白するものである。學問に於けるこの物の無知は何等か特殊なる性質のものであるであらうか。これらの事情を檢べるために私は問と類縁ある問題の構造を研究してみよう。

問題とは顯はにされた問である。ところで問が顯はになるのはその觀點に於てであつたから、問題にあつてはこれが特に顯はになつてゐるのがつねである。この

場合觀點はいつも定かなる形を具へてゐる。問題に於て觀點が明確に形成されてゐるのは、この形成作用に所謂立場が與つてはたらいてゐるがためである。このとき觀點を規定するものは立場であり、むしろ立場はいつでも觀點のうちに含まれてゐる。觀點は問題にあつてはたゞ立場に對してのみあり、そしてかやうにして問題そのものもまたたゞ立場に對してのみ存在する。Problemの語源であるギリシヤ語の *problema* (文字通りの譯では *Vorwurf*) が示してゐるやうに、問題はひとつの „Pro-“ 或ひは „Vor-“ の契機をそれ自身に於てもつてゐる。それは我々の言葉の前提、先入主見などの意味するが如き、「先」または「前」の性格を擔つてゐる。私があらゆる問題は立場を含んでゐると云ふのはこの意味である。ところが人々は問題の有するこの性質に氣附かない。そして彼等はプラトンやデカルト、カントなどに於て、彼等自身の研究に役立つものとなるやうに細工され得べきものとして所謂問題を求めてゐる。然し一定の問題は唯一定の立場にとつてのみ存在する。この事實が最も屢見逃され、看過されるのは如何なる理由にもとづくのであらうか。その最も根本的な理由について論ずるのは後にまはして、今そのひとつの理由を擧げるならば、それは立場が傳承されるよりも問題は一層多く傳承される性質をもつてゐると云ふに

ある。けだし立場はそれが立場として自覺されるときそれが立場として有する制限は同時に自覺されることが容易である。立場はこの制限の自覺と共に捨て去られることが多い、けれどもその立場の形作つた問題はそれにも拘らずその後にもなほ生存を續けるのが普通である。なせならそのとき問題は既に一定の明確な形に固定されて居り、そしてそれは勿論そのうちに立場を宿してゐるにも拘らず、それはかかる固定作用によつてその本來の立場から獨立となり、それから離れて浮游する傾向を得て、その美しき名を掲げて自由に徘徊するに至り得るからである。かくして問題は次第にそれ自身として人々に熟知され、謂はゞ通言葉となつて、おのづから自明性を伴つて來る。人々はおもはや問題そのものに就て、殊にその由來に就て反省をめぐらすことなく、ただ問題論するのである。我々は斯くの如き問題を求めることをもはや必要としない。我々はそのあまりに多くのものに出會ふ、——主觀、客觀、自由、必然、價值、存在、等々。古き立場を棄てたと公言する人々がなほかつ古き問題を論じてみづから怪しまない、と云ふ不思議な現象は問題の有する右の性質からしてのみ理解されることが出来るであらう。即ち問題は立場から游離する性質を具へてゐる。固よりこの問題が展開されるに當つては、そのうちに含まれてゐた

立場はおのづから現はれて來るに相違ないが、しかしそのときひとはこの問題の有するかの必然性にのみ心を奪はれて、この立場そのものにはもはや氣附かない。實際問題はすぐれて必然性をもつてゐると考へられることが出来る。問の構造の聯關に必然性を與へるところの觀點は、顯はなる問としての問題にあつては、單なる問に於けるよりも一層明確に形作られてゐるが故である。然しながら問題に於て、問の有するこの形式的なる必然性が増大するに従つて、問の觀點に必然的に伴はれる危険性はまた一層増大するであらう。すべて觀點は問はれたものを限定してそれに於て我々の見得る範圍を局限する。觀點が明確に固定されてそれが明らさまに問の重心を占めるるとき、この限定と局限とはまた明確に固定されることゝならう。他の言葉を用ゐるならば、問はれたものに對する接近の通路は問題と共に確定して與へられる。觀點は問はれたものをそのものとして顧ることなく、却て唯自己の通路に従つてそれに向つて無頓着にはたらきかける。即ちそれはひとつの暴力として問はれたものに迫り來る。このやうにして觀點は問はれたものを故意に狭めるばかりでなく、またそれを歪め、曲げ、そして破壊するに至る。問は斯く問ふことが問はれたものに對して一體に有意味であるか否かを尋ねることなく問はれるのであ

る。こゝに問の觀點が問はれたものと何等關係なきものとなり得る可能性は存在するのである。

問題に於ける物に對する斯くの如き無視は、問題が顯はにされた問として有する第二の特性によつて更に著しくなるであらう。あらゆる問は答に向ふ衝動をもつてゐる。しかるに問題は明らさまに答を欲求する。むしろそれは答へらるべきもの、答へられるに價値あるものとして立てられた問である、簡單に云へば、問題は課題としての性格を擔つてゐる。ひとは絶對に答に到達せねばならない。凡ては答に集中される。この必然性は問題の提出に於て恰も問はれたものを歪めそれを蔽ふこととなる。ひとはひたすらに答に向つて慕進するが故に、問題に於ては問はれたものは普通の問に於けるよりも一層少く吟味されてゐる。問はれたものは彼の立場より答へ得るものとしてまたは答へ得る限りに於て問はれるのであつて、それがそれ自體に於て彼の問に答ふべきものであるかまたは答へ得るものであるかは顧慮されてゐない。それにも拘らずそれがつねに答をもたらし得ると見えるのは、問の觀點がひとつの強制力としてはたらい、問はれたものを何等かの意味で彼の問に答へ得るものとしてあらかじめ限定してゐるためである。(未完)